台風21号報告
初めて怖気づいた被災体験

岸和田市
ぐっすら作業所
川﨑 優樹（かわさき ゆうき）

私は頚髄損傷で電動車いすを使用しながらマンションの2階で一人暮らしをしています。9月4日午後1時ごろ、泉州地域に台風21号が上陸し、甚大な被害をもたらしました。私のマンションも停電と断水の被害にあいました。当時一緒にいたヘルパーに外の状況を報告してもらい、初めて台風の被害の大きさに驚きました。その時はその後の生活に支障がでるなど微塵も思わず、夕方まで過ごしていました。日が陰り、暗がりが部屋を包み込むころ、初めて漠然とした不安が脳裏をよぎりました。普段、おしゃべりな僕が口を閉ざすほどのパニックになりました。

午後7時ごろ、自立生活センター・いこらーのスタッフから電話があり自宅に駆けつけてくれることになりました。停電のためエアマットが使えず、夜間のヘルパーも居ないため、自宅での生活を諦め避難することを決めました。エレベーターが使用できず、2階から降りるために人手がいるため、急遽連絡したにも関わらず、昔からの友人が駆け付けてくれ、電動車いすを5名で1階まで降ろしてもらい、車で隣町のいこらー代表の東谷さんの自宅へ向かいました。翌日には自宅の停電と断水は復旧し、避難生活は一晩で終わりましたが、このまま避難生活が長引いてしまうことを考えるとどうなっていたのか想像がつきません。

今回の被災体験で感じた課題は二つあります。事前の防災計画と、普段からの地域の人々の繋がりの必要性です。この課題を胸にさまざまな活動に取り組んでいます。

台風21号報告
屋根と雨漏り

大阪市
（社福）ゆうのゆう 理事
大槻 瑞文（おおつき みずふみ）

雨漏りが続く施設内は紙オムツで覆われました

暴風に耐えきれず不気味な音を立て、プールほどもある大きな重い屋根（鉄骨造）が落下しました。重症心身障害者が多く通所する生活介護施設「デーセンター夢飛行」（大阪市西成区・定員31名）の屋根全体が落ちるというまさかの被害。

暴風のなか通行人や車両がなかったことは幸いでしたが、台風後に続く雨、雨、雨…。雨漏りはどんどん広がり、日を追うごとにあちらからこちらから。施設内を紙オムツで覆っても追い付かず、停電で暗い施設に泊まり込んだ夜、新たな雨漏りの音を聞く度、途方に暮れました。

一方嬉しいこともありました。屋根の応急修理では業者も大きなブルーシートが品薄のため手に入らず、すがったのは岩手のNPO「響生」（ひびき）さんでした。すぐにブルーシートを宅急便で送ってくださり感謝感激。東日本大震災での支援以来互いに行き来する関係でした。多くの方から様々な応援をいただき、約1ケ月半後には屋根が復旧、通常活動を再開しました。

雨漏りの間、区民センターや統廃合された小学校の利用を大阪市にお願いしたのですが、「罹災証明なら区総務課で」「そんな制度はない」「施設がダメならヘルパーの時間増で」とつれない返事。時間数を増やせば、医療的ケアを必要とする重症心身障害者のヘルパーがすぐに確保できると思われていることに驚く以上に、「福祉避難所設置や地域連携を福祉計画で位置付けている割には、行政ってこんなもんなのね」とブルーな気分が…。現在はオーナーと新築の相談中。災害に耐える新しい活動拠点を模索、検討しています！

熊本からの報告

益城町
（一社）障害者がともに暮らせる地域創生館 代表理事
東 俊裕（ひがし としひろ）

熊本地震発災後、ゆめ風基金の応援を受けて「被災地障害者センターくまもと」を立ち上げ、従来から築き上げてきた住環境や生活環境に甚大な被害を受けたおよそ600名にのぼる在宅障害者に対して、災害支援を行ってきました。しかし、災害後1年、2年と時間が経つにつれて、ボランティアもその節目、節目で減少し、義援金もほぼ底をつく状態になっております。

当社団は、早晩、そういった事態が訪れることを想定し、災害支援を続けて行くには、義援金等に頼らず、居宅支援事業をしながら、自前で災害支援が出来るような経済的な基盤を整えようと考え、熊本地震の3ヶ月後に立ち上げたものです。

しかし、居宅支援事業を行うには、介護の資格を持った人材の確保が困難でした。揃ったかなと思うと種々の事情で辞める人が出たりすることが何度かあって、県の認可を受けて居宅支援事業をはじめられたのは今年（2018）の7月からでした。その間スタッフの給料等で当社団がいただいた義援金も少なくなってきて、再度ゆめ風基金の応援を仰いでおりますが、思うように介護ニーズとサービス提供をマッチングできないなど、独立独歩のような状態になるには、まだまだ困難な事情があります。

とはいえ、障害者からのSOSはまだまだ続いています。今年の4月から8月までの4ヶ月間だけでも災害支援の派遣件数は、114件、支援者の派遣は、延べで当社団のスタッフが233名、ボランティアが79名にのぼっております。今後も頑張っていきたいと思っております。ご支援の程よろしくお願いします。

（2018年11月記）

福島からの報告
あの日から…

川内村
NPO法人輝き 代表理事
秋元 武俊（あきもと たけとし）

あの日から。この言葉を聞くと思い浮かぶことは一つ。東日本大震災と原発事故のこと。目を閉じるとあの日の光景がよみがえり、体の力が抜けていく。必死に逃げた。ようやく落ち着き、村にいち早く戻った障害を持つ人と家族。行き場がなく、自宅で何もせず、気力をなくした人たち。がらんとした村に、「集まる場所を作ろう」と手をさしのべてくださったNPO法人 Jinの川村さん。

「障害を持つ人が、自分のできることを仲間とともに築いていくこと」を目的として、サロンどじょうができました。利用する人は、3名しかいませんでした。毎日、散歩をしたり料理を作って食べたりと、のんびり過ごすことでした。関西からの応援を受けて、1年、2年・・と過ぎ去り、利用する人も増えてきました。

平成29年度から利用する方も8名に増え、NPO法人Jinからの法人輝きに経営が変わり、平成30年6月1日より、就労施設の認定を受けました。毎月の工賃を楽しみに、毎日頑張っている利用者さんたち。利用する方にサービスを行うために足りないものが山ほどありました。いろいろな方から支援を受け今にたどり着いています。

ゆめ風基金の人も現状を知って、村まで足を運んでくださいました。本当にありがたいことです。利用する人、支援する私たちも、あの日からやっと・・の思いですが、みな前を向いて前進しています。後は振り向かない。東北の魂を見せつけてやります。